

シリーズ 私の一冊の本

国際関係学部 岩倉さやか 先生

夏目漱石著 『草枕』 (岩波文庫 緑 10-4)

閲覧室 2階 学生文庫 岩文緑/10/4 岩波書店 出版

子供の頃から、この頭もなければ尻尾もないような小説がなぜかお気に入りでした。小学生の頃『草枕』に出会って以来、気持ちを落ち着かせたいときには、この本を開いて、心の調律めいたことをするのが十数年来の習慣になっています。その意味では、私にとってこれ以上（私の）一冊と呼ぶに相応しい本はありません。

那古井の温泉場にやってきた画工の「余」は、逗留先で那美さんという美しい出戻りの女性に出遭います。本作品を紹介するのに、これ以上の説明を付け加えるのは難しい。というよりもむしろ、筋を説明して、要約してしまうことを拒むような性格が、この小説にはあります。

だからこそ、開く頁はどこでも構わない。全部で十三章から成る本書は、そのすべてが、詩句を一つ一つ継いでいったような濃密な文章で構成されていて、どの場面、どの言い回しを取っても、彫琢されつくした美の世界が、すっきりと、明瞭に立ち上がってきます。能「高砂」のツレに生き写しの茶店の婆さん。床屋の主人と余との軽妙な会話。青磁の器から生まれ出たような練羊羹の心地よい色彩。振袖を着た那美さんの立ち姿。小説は筋なんかどうでもいい、「御籤を引くやうに、ぱつと開けて、開いた所を、漫然と読んでるのが面白い」のだ、という余の言葉がありますが、私自身、余の提唱する読みに倣って、この「美を生命とする俳句的小説」の世界を飽かず逍遥してきました。

しかしやはり、この美しい世界の軸となって作品全体を支えているのは、「ある因果の細い糸」で繋がれた、余と那美さんの「非人情」的な間柄にあるのだろうと思います。作中では、これは普通の男女の関係ではない、恋や愛といった境界とは無縁だという断りがくり返し述べられます。にもかかわらず、読後の頭に常に漂うのは、『草枕』に描かれたこの両者の関係こそが、男と女とが築き得る、もっとも美しい在り方なのだろう、というぼんやりとした感慨でした。

そう思わせられる一番の原因は、余の職業を、「見る」ことにおいて特権的な「画工」に設定した作者の巧緻さにあるのでしょう。「見る」という行為は、見る者、見られる者との距離を否定なく示すものであると同時に、眼差しを受けた者を射抜き、把握するものでもあります。離れながら、繋がる。この見る、見られるの間柄が、「非人情」——「人情に非ず」という否定的表現の隠し持つ豊かさを、残りなく表しているのではないかと思うのです。

振り返れば、私が「美しさ」ということを考えるとき、意識の底にはいつも、『草枕』のあらゆる文章が、揺るぎ無い規範として厳然と存在していました。私がこれから踏み出す一歩は、果たして美しいのか、否か。日常の、小さな岐れ路の一つ一つで、余の言葉を、那美さんの所作を、想起し、見つめ、そうすることで実は見守られ、自ずと次の一歩が定まってゆく、そういうことをくり返してきました。踏み迷うことの多いこの世で、心から拠り頼むことのできる道標を得られたことは幸福であったと、いま改めて思うのです。